

2 障がい者の生涯学習プログラムを実施する多様な実施主体（市区町村、大学、民間団体等）に対する支援

障がい者の学びのニーズを踏まえた学習プログラムの実施や、学びの場における障がい者の受入体制の充実のためには、教育だけではなく、医療・福祉・労働など、多様な主体が連携・協働した取組が重要である。また、広域な北海道において移動に困難な方が居住地に関わらず、学びの場に参加できるよう、先行的なモデルプログラムを実施した。

① 多様な主体の連携による学習プログラム構築事業

○趣旨

学校卒業後における障がい者の学習機会拡充のため、教育や医療、福祉の必要な支援のもと、地域における多様な主体の連携・協働による生涯学習プログラムの実施を通して、地域や関係機関のネットワーク構築や合理的配慮の体制整備等を推進するとともに、学習プログラム実施上のノウハウ蓄積による、他地域への取組普及を図る。

○事業内容

多様な主体の連携による、合理的配慮のもと障がいの有無に関わらず誰もが参加できる講座やイベント（体験活動、交流活動）等の実施

○実施管内

渡島（函館市）、空知（砂川市）、日高（新ひだか町）、上川（鷹栖町）、十勝（帯広市）、胆振（苫小牧市） ※空知はR 5に引き続き実施

○その他

事業の実施にあたり、運営者が共通理解を図り、安心・安全な事業とするため、事前にスタートアップ支援学習会を実施した。

② スタートアップ支援学習会

○趣旨

学校卒業後の障がい者の学びの機会拡充に向けた取組の開始や拡充を検討する団体の職員が、必要な専門的知識や技術について学ぶ学習会や取組を実施する上での悩みを解決する相談機会を設けることで、団体等のスタートアップを支援する。

○内容

説明、講義、相談・助言

○実施管内

渡島（函館市）、日高（新ひだか町）、胆振（白老町）、上川（鷹栖町）、十勝（帯広市）

③ 障がい者の生涯学習推進キックオフミーティング〔R 6年度新設〕

○趣旨

学校卒業後の障がい者の学びの機会拡充に向けて、取組の基本的な視点、合理的配慮について学ぶとともに、各教育局管内での障がいの有無に関わらない生涯学習活動の推進に向けた共通理解を図る。

○日時

令和6年6月26日（水） 10:00～16:30

○会場

・北海道立道民活動センターかでの2・7 1010 会議室
・Z o o m配信を利用したオンライン参加も可能

○参加者

各教育局社会教育指導班、主査（地学協働、研修・地学協働）、社会教育課ネイパルグループ、市町村教育委員会社会教育・生涯学習担当者 69名

令和6年度 文部科学省委託事業「学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業」
(道教委事業名：障がい者の生涯学習支援体制構築モデル事業)

多様な主体の連携による学習プログラム構築事業 開催要項（準則）

1 目 的

教育や医療・福祉等、多様な主体が連携・協働して実施する学習プログラムを開発し、その成果を参考に、市町村教育委員会や各種団体で実施する生涯学習事業において障がいの有無に関わらず全ての人が共に学ぶことのできる環境作りへのノウハウを普及する。

2 主 催

北海道教育委員会（主管教育局：胆振、日高、渡島、上川、十勝）

3 対 象

市町村及び市町村教育委員会、NPO団体、障害者当事者団体、文化団体、スポーツ団体、学校、医療及び福祉法人 等

4 期 日

関係教育局で設定（原則、7～1月の間での開催とする）

5 内 容（例）

（1）体験活動（創作体験、自然体験、農業体験、宿泊体験等）

※実施の工夫の例

- ・障がい者の移動時間やトイレ休憩も勘案して、時間に余裕を持ったプログラムで実施する
- ・障がい者が参加できないアクティビティがある場合は、リモートやメタバース等のICTを活用するなど、活動の様子や景色を共有できる工夫をする
- ・申込時に配慮事項が確認できる案内を作成するなど、合理的配慮に留意する

（2）交流活動

※実施の工夫の例

- ・多目的トイレの近くの研修室で実施する
- ・手話通訳者の派遣、筆談やUDトークを活用して実施する

（3）その他

6 提出書類

- （1）別紙様式1「実施計画書」を実施予定日の3週間前までに提出すること
- （2）別紙様式2「経費計画書」を配当希望日の3週間前までに提出すること
- （3）報告様式「実施報告書」を事業実施後、3週間以内に提出すること

7 その他

- （1）実施に当たっては複数の団体が連携して事業を企画・運営すること。
- （2）事業の実施にあたっては、地元の教育委員会等との連携や関係団体への事業成果の普及を図る工夫を行い、障がい者の生涯学習の機会の充実を図るほか、地域における継続的な取組の定着を目指すこと。
- （3）障がい当事者及びその家族が参加できる学習プログラムを中心とするが、共生社会構築の観点から、可能な範囲で障がいの有無に関わらず誰もが参加できる内容とすること。
- （4）実施にあたっては、時間に余裕を持った内容にするなど、安全面に配慮すること。
- （5）事業の企画段階で、「スタートアップ支援学習会」を実施し、安全性の確保や参加者が意欲的に活動できるための共通認識をもって運営できるように配慮すること。
- （6）参加者募集時に、「障がい種や配慮事項」「救急時の対応」等を確認するとともに、事業実施時の合理的配慮について実施要項等で示し、参加者への周知と運営者間の共有を行うこと。

令和6年度 文部科学省委託事業「学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業」
(道教委事業名：障がい者の生涯学習支援体制構築モデル事業)
多様な主体の連携による学習プログラム構築事業「サップに挑戦」開催要項

1 目 的

教育、福祉及び地域団体等、多様な主体が連携・協働して実施する学習プログラムを開発し、その成果を参考に、市町村教育委員会や各種団体で実施する生涯学習事業において障がいの有無に関わらず全ての人が共に学ぶことのできる環境づくりへのノウハウを普及する。

2 主 催

北海道教育委員会（主管：渡島教育局）

3 共 催

アトUISスポーツプロモーション

4 協 力

函館市教育委員会、知内町教育委員会、シーイクオリティ、一般社団法人ココホル、就労継続支援B型 Kaede、渡島社会教育主事会

5 対 象

- ①函館盲学校小学部児童
- ②聴覚障がい者スキー協会員
- ③どなたでも

6 日 時

①令和6年（2024年）7月2日（火）開始 8:30～終了 12:30
※予備日 7月3日（水）

②令和6年（2024年）7月13日（土）開始 10:30～終了 15:30
※予備日 7月14日（日）

③令和6年（2024年）7月21日（日）開始 10:00～終了 14:30

7 会 場

七重浜海浜公園（七重浜海水浴場）

8 内 容

開始	【体験】サップ体験 【振り返り】サップ体験の感想	終了
----	-----------------------------	----

9 その他

当日の様子は、報道機関に提供することや報告書等に掲載する場合があります。

「サップに挑戦」

1 事業概要

- ・ 目的：教育、福祉及び地域団体等、多様な主体が連携・協働して実施する学習プログラムを開発し、その成果を参考に、市町村教育委員会や各種団体で実施する生涯学習事業において、障がいの有無に関わらず全ての人が共に学ぶことのできる環境づくりへのノウハウを普及する。
- ・ 連携団体：アトゥイスportsプロモーション、函館市教育委員会、知内町教育委員会、シーイクオリティ、一般社団法人ココホル、就労継続支援B型 Kaede、渡島社会教育主事会
- ・ 日時：①令和6年（2024年）7月2日（火）8:30～12:30
②令和6年（2024年）7月13日（土）10:30～15:30
③令和6年（2024年）7月21日（日）10:00～13:30
- ・ 会場：七重浜海浜公園（七重浜海水浴場）
- ・ 対象：①函館盲学校児童
②聴覚障がい者スキー協会員
③どなたでも
- ・ 参加者：①7名（うち、障がいのある方7名）
②4名（うち、障がいのある方4名）
③5名（うち、障がいのある方3名）



2 内容や活動の様子

- ・ 参加者は、一人に一枚ずつ用意されたボードを使用して、座ったり立ったり、自分の思い思いのスタイルでサップ体験に挑戦した。
- ・ 時間の経過とともに活動に慣れた参加者は、支援者が補助する手を離すよう伝え、自力でパドルを漕いで進む様子が見られた。
- ・ 初めて海で活動をした参加者は、活動の合間に指先で砂を触り、感触を楽しむ様子が見られた。
- ・ 地域のサップインストラクターや支援者が、様々な障がい当事者に対応する貴重な研修機会にもなった。特に函館盲学校児童対象の体験日には、若干の波と風がある条件下でも、安全に活動を進めることができた。このことが、支援者の自信につながり、今後も同じような支援に関わりたいとの思いをメンバー同士で共有した。



3 運営上の留意事項

- ・海に入る前に、浜辺で活動イメージを十分に持たせてから、参加者の希望に合わせたメニューを提供した（支援者にボードをおさえてもらい進む、自分で漕いで進むなど）。
- ・函館盲学校体験会では、一人で体験することが不安な児童に対しては、引率者（教諭）と二人でサップに乗り込み体験した。



4 参加者（引率者）からの感想

- ・本人は全盲のため初めて海で活動した。潮風に吹かれ、サップに乗って波に揺れる感覚は、好きだろうなと思った。（函館盲学校の教諭）
- ・聴覚障がい者は、耳から得る音が無いので、バランス感覚を補うためのコーディネーション能力を高める効果があると感じた。（指導者）
- ・函館盲学校体験会に関する報道を見て、知的障がいのある弟も体験できるかと思い申し込んだ。小さい頃からゴムボートに乗るのが好きだったのでとても楽しそうだった。（知的障がい者の姉）



5 成果と課題

- 成果
 - ・地域の社会教育団体と福祉関係団体等の多様な主体が連携することで、サップに載せた水陸両用車椅子（ヒッポ）を使用して、誰もが楽しむことができる生涯スポーツプログラム（サップ体験）の実施が実現した。
 - ・特別支援学校と地域の関係団体等が連携することで、学校卒業後につながる生涯学習活動を視覚障がいのある児童に体験させることができた。
 - ・視覚障がいがあっても、水に浮く感覚や波に揺られる感覚を楽しむことができるという実態について、生涯学習の指導者及び支援者が気づきを得る機会となった。
 - ・事業関係者が障がい当事者の普段の様子を把握する機会を、周辺自治体の関係職員や施設担当者を対象としたスタートアップ支援学習会に位置付け、事業づくりのノウハウを普及することができた。
- 課題
 - ・学校卒業後の生涯学習を充実させるためには、在学中に様々な生涯学習を体験することが重要であり、特別支援学校と社会教育団体等の連携した取組が一層推進する必要がある。
 - ・屋外で取り組む活動は、活動をサポートする支援者の十分な人数確保が求められる（荒天延期になった際の再調整にも配慮する必要がある）。